

## DOCTOR INTERVIEW

ドクター インタビュー

医療法人 笹川皮フ科

## 笹川 征雄 先生

-----先生は、「NPO法人シックハウスを考える会」の副理事長として、シックハウス症候群、シックスクールの問題にも取り組まれておられますが、きっかけはございますか？

1997年に大阪府保険医協会の「シックハウス症候群」という講演会があって、それが僕が室内環境に関心をもつきっかけとなりました。ホルムアルデヒドってありますね。昔はホルムアルデヒドは化粧品や衣類などに入っていて、かぶれのもとで有名でした。かぶれの原因を調べるパッチテストという皮膚テストがありますが、臨床医にとってとても大事なことに意外と普及していなかったのです。そこで、これからの皮膚科医は皮膚科独自の技術を持たなければ…と思い、当時、大阪皮膚科臨床医会の幹事で研究部門を担当していたので、開業医にパッチテストを普及させるための研究活動をずっとやってきていました。そしてシックハウスに取り組んでいる菌科の先生から、ホルムアルデヒドとアトピーのパッチテストのデータを持っているなら、是非発表して欲しいと言われ発表し、これがマスコミにも大きく取り上げられました。

それまではホルムアルデヒドは接触によるかぶれの原因物質だったのですが、今度は室内空気を汚染するものという全然違うかたちで、新たな問題として浮上してきたのです。

その頃はシックハウス症候群の診断基準があまりなかったのです。WHO(世界保健機関)の基準があるにはあったけれど、医者が現場で使えるようなものがなかったんですね。そこで僕はいろいろと勉強して、2001年度にシックハウス症候群の診断基準を日本で初めて作りました。それまでも基準を作っておられた先生もいましたが、シックハウス症候群と化学物質過敏症を同じカテゴリーと考えて診断基準を作られていましたが、僕は違うと考えていたのでシックハウス症候群だけの診断基準を発表しました。

-----似たようなコトバですがシックスクールというのがありませんね。それについてお聞かせください。

シックスクールというのは、シックハウスの学校の場合ですね。東京・調布市に新しく出来た学校でシックスクールの問題が起きたことがあって、シックハウスの原因となるトルエン濃度がガイドラインの10倍も高かったんですよ。判っていたにもかかわらず開校してしまって、そんな教室で1ヶ月間も児童は勉強していたんですね。当然のこと、児童たちに健康障害などが出てきました。マスコミでも頻繁に取り上げられ社会問題になったのですが、調布市もこんな事例は初めてでどうしていいかわからないと大混乱でした。僕は「NPOシックハウスを考える会」の副理事長をしていましたが、調布市から1000万円の調査費をもらって調査に当たりました。

空気質測定から健康調査まで詳細に調査しました。シックスクールが問題になったのもその頃からで、新聞にもいっぱい載りましたし、取材もいっぱい来ましたね。韓国のKBSやSBSからも取材にきました。それから遡って1年前にも大阪・堺市の湊保育園でトルエン濃度がガイドラインの20倍から30倍もの高い数値を示すケースがあって、当時、0歳の赤ちゃんから5歳の子どもまで保育されていたので、お母さんが激怒してそれはそれは大変なことでした。この場合はトルエンが床の奥底に染み込んでなかなか放散(蒸発)しなかったようで、現場にいったら非常に強い刺激臭がありました。NHKも特集を組んで大きく取り上げましたね。

実はこれは、縦割り行政の弊害なのです。厚生労働省はガイドラインで13物質を決めていてトルエンが入っていましたが、国土交通省のガイドラインにはトルエンは入ってなかった。建築設計士はお目付である国土交通省のガイドラインだけをもとにホルムアルデヒドだけに配慮



笹川先生は、昭和43年北野病院皮膚科に勤務、昭和49年から大阪赤十字病院皮膚科に勤務され、昭和51年大阪市城東区に笹川皮フ科を開院し25周年を迎えられました。

今年6月11日(土)・12(日)に大阪国際会議場グランキューブで開催される「日本臨床皮膚科医会総会」の会頭を勤めておられます。

〒536-0016  
大阪市城東区新喜多1-1-15  
TEL.06-6931-8009

して設計していたんですね。設計士はトルエンがまったく頭にはなかったと後悔していました。

こういった例のように、化学物質に最も気を使うべき子どもたちが健康被害を浴びることが社会的な問題になってきたのです。建築前にシックスクールにならないように十分な配慮をした設計をして欲しいと父兄からも要望を受けていたのにも関わらず、こういう問題が発生してしまっただけですね。

-----シックスクールに関しては難問山積ですね。ところで6月に開催される臨床学術大会での会頭講演のテーマ「室内環境と皮膚」について少しお聞かせいただけますか？

これからの時代、地球温暖化の問題などで省エネのために部屋を閉めきることが多くなりますよね。僕はシックハウスの第二波が起こるのではないかと心配なんです。

第一波は、1973年のオイルショックのときで、世界的な省エネ指向があって、住宅建設においては高气密住宅が主流になってきました。僕はシックハウスが起こった原因は3つあると考えています。ひとつは、省エネ設計で気密性の高い室内環境になったこと、ひとつは、ビルなど開かない窓が多くなったこと、共働きであまり窓を開けないことなど、部屋の外から自然な空気が室内に入らないようになったこと、あとひとつは、健康被害で有名になったホルムアルデヒドが含まれた合板や壁紙などの建築材料や、私たちの生活で防臭防虫剤、香水、化粧品、パソコンやテレビなどの電化製品などからVOC(揮発性有機化合物)が放散する生活用品を多く使うようになったこと、これらはシックハウスが起こった3つの原因だと思っています。安心安全で健康によい住宅より、見栄えのよいデザイン、目先の快適さ、安く早くできるなどを優先した結果がこのような事態を招いたと思います。

ほとんどの人は一日の生活の中で90%以上の時間を室内で過ごします。このことはみなさん意外と認識されないようですが、やっぱり皮膚は環境と接する一番最前線の臓器なので、じかに化学物質やダニ、カビ、温度湿度などさまざまな環境の影響を受けます。だからこそ室内環境はすごく皮膚にとっては大事なものなんです。にもかかわらずこれまであんまり目を向けてこられなかったというのが現状です。この観点から今後は室内環境と皮膚をテーマとして、もっともっと皮膚科で注目して研究していくことが必要だと思います。判らないこともまだまだたくさんあるんですよ。特別講演では短い時間ですが、そういった主旨で室内環境にはどういった問題があるか、どうあるべきかをお話しようと思っております。

-----開催準備でご多忙の中、たいへん意義のあるお話をお伺いし有難うございました。

取材・三原ナミ(オフィス・メイ)